

閉校の年でも創っていく気持ちで

富津市立金谷小学校長 福中 義宏



1 はじめに

富津市立金谷小学校は富津市の一番南にある小学校である。鋸山の近くで、登山客が行き交う。ロープウェイ、フェリー乗り場や、グルメスポットとして雑誌で紹介されている店もあり、学区は日本各地、さらには海外からも多くの人を訪れる観光地である。今年度、この金谷小学校は明治6年以来、147年の歴史に幕を下ろす年度としてスタートした。湊小学校、天神山小学校、竹岡小学校、金谷小学校と四つの小学校の統合により、来年度から「天羽小学校」としてスタートすることとなっている。

私は校長として2年目を迎える。昨年度は、新入生が0人であったが、本年度は新入生を5人迎え、3年生3人、4年生7人、5年生3人、6年生5人、合計23人の学校である。小規模の学校ではあるが、用務員も含めスタッフ9人で23人を見守ることができる良さもある。

2 校内研修を柱に

昨年度、道徳教育を校内研究テーマにすることがすでに決まっていたことを受け、校内研究を経営の中心に位置付けたいと思った。校内研究は、授業方法についてが中心となるが、毎週研修の時間が確保されており、道徳の授業を通して児童の変容を把握することもできるので、学校経営方針を共通理解していくことにつなげていけるものと考えたからである。

(1)「どんな児童に育ってほしいか」を教職員で共有

学校経営方針を4月に話をするが、教職員の経験や状況によって具体的な姿としてイメージするものは違ってくる。違ってもいいが、共有できるものがほしいと思った。

最初の時間に「どんな児童に育ってほしいか」について話し合いをした。

まず、付箋に思い浮かぶ姿を書く。そして書いたことを説明しながら模造紙に貼っていく。これをKJ法で分類し、ピラミッドチャートにより、どれを優先させるかを、全職員で話し合いながら「良好な人間関係をつくれる児童に育てたい」とまとめた。

(2)「どんな児童に育ってほしいか」を保護者とも共有

P T A総会前に20分間校長が保護者に話す時間が設けられていた。そこで、保護者にも付箋を配り、職員で行ったようにKJ法でグループに分けた。家庭数は18、全員出席であった。少ないからこそその取組である。時間の都合でピラミッドチャートに進めることはできなかったが、保護者の願いも「良好な人間関係をつくること」であった。

統合に向けて、「良好な人間関係をつくること」ができる児童を目指していることが共有できた。このことは、学校内だけでなく将来にわたって重要な資質・能力である。職員と保護者が互いにイメージを聴き合うことでたどり着いたものである。児童を育てていく方向性を共有して、この1年をスタートすることができ、貴重な時間となった。

(3)「あったかい心」を持てる児童

「良好な人間関係をつくること」ができる児童を育てるため、「あったかい心」というキーワードで1年間、全職員が児童らに接することとした。「あったかい心」が感じられた児童の言動を見つけて賞賛し、広めていった。

「あったかい」気持ちにしてくれた友達の言動を意識できる児童が増えてきている。今年度は、人事異動で5人新メンバーとなったので、昨年度とは逆に「あったかい心」の具体的な姿を共有することを予定している。

道徳での児童の自己評価のアンケートは、付箋に書かれていた姿も含めたものを項目として加えた。今後の児童の変容によって項目は見直していく予定である。

3 9名で23人を育てる体制

「あったかい心」は生活の中で多く現れることを願うものである。児童同士が関わりを持つ場面でそれが見られる。今年度は「9名で23人を育てる体制」をより具体的にし、「あったかい心」を見つけられるように場を設定したいと考えている。

授業は、学年ごとに少人数の展開である。来年度から、児童は現在のクラスの7倍から10倍の人数の仲間と過ごしていくことになるので、できるだけ「集団活動」をさせたいと考えた。そこで今年度は「朝の会」と「給食」を全校で行うこととした。また、掃除は縦割り班活動として行うこととした。そこに9名のスタッフが様々に関わっていくのである。

(1)全校給食

これまでは、仕事の分担やグループごとの当番をする、並んで配膳を受けるということが必要なかった児童らであるため、もたつきが見られた。それでもあまり手を出さず、6

年生の采配で進めるようにした。1年生も初日から給食当番をする児童もいて、できそうな仕事を振り分けるなどの様子が見られた。

ある日、給食の残りが減ってきていると給食センターから話があった。全校給食の効果だと感じた。また、高学年の児童は、食べ終わったら進んで掃除分担の確認も行うようになり、リーダー性を発揮するようになった。

(2)全校朝読書、全校朝の会

クラス担任の健康観察後、教室棟の2階のコンピュータ室兼図書室で全校読書を行っている。最初に来たクラスの児童たちが、静かに読書を始めているため、後から来た児童は次々と静かに始めることができている。周囲を思いやりの行動である。

「全校朝の会」では、全校で歌う時間を設けたことで歌声が元気になった。昨年度までは10人以下で歌っていたので、当然のことではあるが、これまでになかった歌の時間である。11月には市内音楽発表会に全校で参加するので毎日少しずつ練習できる利点も生まれた。「全校朝の会」の取組により、教職員の話にも変化が見られるようになってきた。「このことは朝の会で話をします。」「6年生に〇〇について話をさせたいと思います。」など、15分間のメニューに様々な工夫が盛り込まれ始めている。

4 おわりに

閉校を迎える学校ではあるが、「昨年度と同じに」ではなく、創意工夫の場面が増えていきそうである。「全校朝の会」は一つのきっかけとなると考えている。児童の実態を共有し、活動を組み、修正部分は改善し、小規模校ならではの動きである。これらを強みとし、3月の閉校を迎えたいと思う。

すべては子供たちのために、 そして教職員のために

松戸市立古ヶ崎小学校教頭

いくしま つよし
生島 剛



1 はじめに

古ヶ崎小学校は、来年度50周年を迎える。今年度は、通常学級が23クラス・特別支援学級（情緒学級）が2クラス、児童数721名でスタートした。明るく素直な児童が多く、保護者や先生の期待に応えようと努力できる児童が大半であるが、その一方で、登校に対して消極的な児童や家庭の協力が難しいケースなど、課題も多く存在する。そんな中でも、校長を中心に、若い教職員の頑張りの中堅・ベテラン教職員の経験値を結集して、教職員が一体となって教育活動を進めている。

昨年度、新任教頭として着任し、試行錯誤しながら取り組んだ一部を述べたいと思う。

2 新任教頭としての取組

教頭として何をすべきなのか？着任前から引き継ぎ等で聞いたり、先輩の先生方に聞いたりしていたが、それらをすべて行おうとすると、時間がいくらあっても足りない。今の自分ができることは何か？これまでの学級担任や教務主任として経験したことを生かしながら、更には、管理職として学校全体を見通しながら、教職員を成長させることはできないかという思考に変えた時に、教頭であっても「子供たちのために」という私自身の教員としての原点を再確認した。

(1)教頭通信の発行

学級担任の時に、自分の考えや子供たちの頑張りを学級通信として発行していた。教頭

として、教職員に向けていろいろ伝えたい内容があるので、それを教頭通信という形で発信するようにした。内容は次のようなことを中心に週2回程度を目標に発行を続けた。

①授業改善について

各教室を見て回ると、素晴らしい実践や修正してほしい点に気がつく。それらを通信で紹介することで、学校全体として授業改善が図られることを期待した。また、水泳指導やマラソン大会では、学習指導要領を紹介しながら指導のポイントを伝えることができた。

②安心・安全な教育環境の確保

安心・安全な教育環境が児童にとっても、教職員にとっても大切である。下校時刻を徹底すること・窓側に踏み台となるような机や椅子を置かないなど、その場でも声をかけるが通信でも繰り返し伝えることで定着してきた。

③不祥事防止に向けて

市教委や県教委からの不祥事防止に向けての緊急のFAXが届く。打ち合わせの日には合えば口頭でも指導ができるが、通信でもFAXの内容に触れ、本校から不祥事を出さないよう送付されたリーフレット等を裏面に印刷したり、不祥事の内容と対策を明記したりした。

④新聞記事の紹介

教育関係の記事をチェックしておくことは大切なことだが、現場の学校ではなかなか

か難しい。そこで、私自身が朝チェックした新聞記事の中で、どうしても伝えたいと思う内容があれば、教職員に紹介した。

(2)不登校・長欠対応

本校の課題の一つに不登校児童の多さがある。朝の健康観察後に職員室に来て欠席の確認のための電話をかける学級担任が多くいる。教頭としてできることとして、まずは欠席児童の実態把握と家庭への働きかけを考えた。

①欠席児童の把握

保健室に行けば欠席数や誰が欠席しているかは把握できる。しかし、実際に下駄箱を見ることでそれ以上の情報を得られることもあるので、私は下駄箱から欠席状況を把握していた。そうすることで、靴の入れ方で学級や児童の状態を把握したり、時には靴隠しの現場を発見したりすることができた。

②家庭訪問

担任が午前中から家庭訪問することは難しい。空き時間があれば、対応できるが空き時間を設定できるほどの教職員はいない。そこで、欠席が続いた家庭や心配な家庭については教頭が家庭訪問を行い、様子を確認した。その際、保護者の困り感をじっくりと聞いたり、玄関先から家庭の状況を推測したりした。

③外部機関とのパイプ役

昨年度も松戸市の「子ども家庭相談課」や柏児童相談所とやりとりする機会があった。その中で一番身近であったものが近隣の古ケ崎中学校に配属されたスクールソーシャルワーカーとのつながりである。本校の卒業生の多くは古ケ崎中に進学する。「未来の古ケ崎中生」として、本校の児童にも対応していただいた。不登校児童の家庭に訪問し、保護者の困り感に寄り添ったり、

朝登校を渋っている家庭に出向き、小学校まで一緒に登校したりしていただいた。その連絡調整役として教頭が小学校の窓口になった。

(3)地域とのつながり

町内会の夏祭り、古ケ崎おやじの会主催のスイカ割り大会、古ケ崎小防災会と連携した避難所開設訓練、地域子ども会ソフトボールチームとの交流試合（児童対教職員）など、数多くの地域行事がある。すべての行事が土日であり、休日である。業務改善や働き方改革とは逆行するような形ではあるが、教職員に少しでも参加してもらい、地域の中に入っていく形をとった。学校の教育活動においても保護者や地域の理解を得られやすい状況を作り出し、結果的に学校と地域が同じ方向を向いて教育活動を推進することが可能となっていると実感している。

3 おわりに

試行錯誤した1年が終わり、教頭2年目をスタートさせている。「平成」から「令和」へ、新たな時代に突入したとしても、子供たちが学校や地域の中で成長し、その地域を支える存在となっていくことは変わらないと考える。私自身が初任者として教員生活をスタートさせた時と同じように「すべては子供たちのために」という気持ちを持ち続けることを継続していきたい。そして、更には管理職という立場になり、子供たちを伸ばしたいからこそ、「教職員のために」という視点が大切になってくる。若い教職員が学校現場で多くを占める中で、私自身も学び続ける教員として、「すべては子供たちのために、そして教職員のために」という思いを持ちながら、今後も古ケ崎小の教職員と共に、児童・教職員・保護者・地域のために頑張っていきたい。

主幹教諭・教務主任として心がけていること

ながの みちひろ
市原市立八幡中学校主幹教諭 永野 理 宏



1 はじめに

平成19年度の学校教育法改正によって設置された主幹教諭は、近年積極的に配置が行われている。私は昨年度からその立場になり、教務主任として校務にあたっている。

2 新任主幹教諭研修を受講して

研修会で学んだことの中で一番心に残っているのはカリキュラム・マネジメントについて行われた講義の中での「校務の効率化を図り、職員の余裕を生み出し、生徒を良き方向に導くための、教育課程の経営を行う」という言葉である。この言葉を意識し、生徒のために、職員の多忙化の解消と若年層の育成を意識した教育計画の立案・運営に努めている。

3 主幹教諭として心がけていること

(1)職員室の風通しを良くする

管理職と職員をつなぐ立場であることと、学校の現状を知り課題を確認するために、職員とのコミュニケーションを大切にしている。教務主任であることから、相談を受けたり助言を求められたりする機会は多いが、こちらからも積極的に話しかけている。特に若年層とは毎日言葉を交わすようにしている。

(2)早めの計画提示と柔軟な対応

教務主任が提示する計画を基に学校全体が動いていくため、余裕をもった実践ができるように、先を見て早めに計画を提示することを心がけている。また、計画どおりに進まないことも多いため、学校全体の状況把握に努め、状況に応じた柔軟な対応をするようにしている。

(3)職員の資質能力と同僚性の向上

日常の実践に役立つ内容を、職員が協働して創造することが、職員の資質能力と同僚性の向上につながると思う。そのために、主体的に学び合う参加体験型研修を実践している。全職員を対象とした「不祥事防止研修」では、⑦飲酒・交通安全 ⑧体罰 ⑨パワハラ・セクハラ ⑩情報漏洩・公金横領の四つのグループに分け、中堅職員をグループリーダー・サブリーダーとしてのグループ別研修と、各グループの研修内容を全職員で共有するための全体研修を行っている。また、教職経験年数の少ない職員が日常の実践の中で抱えている課題や悩みなどを題材に、校内研修を実践している。中堅・ベテラン職員が講師を務め、自身が先輩から学んだことや実践を通して身に付けてきたスキルを後輩に伝えている。近年、異業種・他校種・他都道府県での勤務経験や、講師経験により多くの学校での勤務経験を持つ職員が増えている。各職員が持っている経験は学校の宝である。それらの宝を共有し、職員が心をつなげて、生徒のために職務を遂行する「チーム八幡」を築きたい。

4 おわりに

研修や先輩方から多くのことを学ぶとともに、校長・教頭をはじめとする職員に支えられて、2年目を迎えることができた。生きる力を身に付け、社会で活躍できる生徒を育成するために、これからも主幹教諭として全体をマネジメントし、職員と協力して職務にあたりたい。

学びを生かす

たかだ いずみ
八千代市立大和田小学校教諭 高田 伊都 美



「子供に寄り添い、共に考える」これは私が、昨年度の初任者研修で学んだことである。私は、感情のコントロールが苦手な子供や、不登校の子供、思春期ならではの悩みを抱える子供など様々な子供たちと1年間を共に過ごしてきた。しかし、自分の心に余裕がないと、つい子供の話聴く前に、指導ばかりしてしまっていた。その時、初任者研修でコーチングについて学んだことを思い出した。それは、相手を認め、よく聴き、よく問いかけるということである。子供が思っていることを、最後までゆっくりと聴き、認め、どうしていききたいか共に考えた。すると、子供が素直に自分の思いを話すようになり、今後どうすればよいか自分で考え、少しずつ行動できるようになった。また、私が悩んだ時にいつも支え、解決策を共に考えてくださったのは、自校の先輩の先生方である。悩んでいることを素直に話し、先輩方の考えや指導方法を聞くことは非常に勉強になった。

私は、現在4年生39名の学級担任をしている。このクラスの子供たちも、それぞれの思いや悩みをもっている。一人一人の行動や、表情をよく見たり、聴いたり、一緒に話したりすることで、子供のことをよく知っていききたい。そして、私自身ゆとりをもって子供たちと接することができるように、昨年度の反省を生かし、見通しをもって子供と向き合っていきたい。

初任者研修を通して学んだこと

みその あやか
白子町立白子中学校教諭 御園 綾 香



昨年度は初めてのことでばかりで、壁にぶつかり、苦しい状況もあった。しかし、周りの先生方や様々な立場の方々から色々なことを教えていただき、無事に2年目を迎えることができた。

初任者研修では、授業づくりや学級経営、社会人としての在り方など幅広く学ぶことができた。また、先輩方や同期と悩みを共有し、実践的なアドバイスをいただける貴重な時間だった。

その中でも、自己肯定感についての講義が印象に残っている。講義後、私は生徒一人一人と向き合うことの大切さを感じ、生徒たちの良さを見つけて伝えていくよう意識して指導できた。道徳の授業では、生徒がお互いの良い点を伝え合う機会を何度か設けた。その中で、褒められたときに生徒たちが照れながらも喜ぶ様子が忘れられない。また、日々の生活の中でのコミュニケーションはもちろんだが、生活ノートを通して生徒の本音や考え方を知り、理解することを心がけた。できるだけ生徒一人一人の励みになるようなコメントを返すようにしている。

また、学級経営についての研修を通して、担任である私の姿が生徒たちに反映されていくことを痛感した。学級に落ち着きがない時、うまくいかない時には、まず、自分の姿や指導の仕方を見つめ直す必要があることを学んだ。常に意識を高く持ち、見通しをもった指導を心がけていきたいと思う。今後も常に学び続ける姿勢を忘れず、様々なことに挑戦し、生徒たちと共に成長していきたい。

子供の「伝えたい」という思いから ～難聴理解授業の実践を通して～

成田市立成田小学校教諭 亀田 真季



1 はじめに

私は、昨年度から難聴特別支援学級（以下難聴学級と記載）の担任をしている。市内から8名の子供が通級している。

そこでは、補聴器の適切な装用、言語学習、聴覚学習等の他、障害認識を含んだ自己認識に関する学習を行う。教科書のない難聴学級の授業は、常に「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」という生きる力の育成につながっている。初めて難聴学級の担任となった私は、その難しさに戸惑い苦しんだ。しかし、子供や保護者と正面から向き合えない教師でいるのは、もっと嫌だった。

さらに、難聴理解授業をしてほしいと保護者から要望があった。聞こえにくさについて、共に過ごす学級の仲間に自ら伝える…抵抗感はないのだろうか。千葉聾学校の先生方に助言をいただき、保護者に話を聞き、子供がやりたいことを探り、子供と共に創る難聴理解授業に取り組んだ。通常の学級の中で難聴児が自ら聞こえにくさ等について語るこの授業について、お伝えしたい。

2 難聴理解授業の取組

(1)本人・保護者の思いから

難聴という障害は外からは見えない。「補聴器や人工内耳をつけていれば、聞こえているのだからわかるだろう」という誤解もある。

子供には、「僕は補聴器をつけているから、ドッジボールは好きだけどボールを頭に当たないように気を付けてほしい」「デジタルワイヤレス補聴援助システムをきちんと使ってほ

しい」等の思いがある。保護者は、わが子の聞こえにくさを周りに正しく理解してほしいと願っている。この思いや願いを学習課題とするところから授業創りはスタートした。

(2)思いを伝えるには

本校の子供を例に挙げる。本人は、補聴器について周りに正しく理解してもらい、うまく活用するには静かな環境であることが大事であることを理解してほしいと思っていた。そのためには、まず本人が補聴器のつくりや機能について理解することが必要である。本を調べたり、補聴器の模型を作ったりすることを通して、時には補聴器にマイクが2つあることや、ベートーベンの補聴器の形が今と全く違うことに驚きながら、理解を深めていった。

さらに、どうしたらわかりやすく伝えられるか考えさせた。表や絵で見せる、リーフレットを作る、クイズ形式やゲームを取り入れる、補聴器体験をする等、発達段階に応じてやりたい方法を選ぶようにした。すると、クイズ形式を取り入れながらプレゼンテーションソフトでの説明を選ぶとともに、みんなに自分の補聴器の写真を見せて、絵を描いてもらうことを発案した。ただ話を聞くだけではなく、じっくりと見本を見ながら絵に描くことで、補聴器を身近に感じ、形や仕組みについてより理解してもらおうと思ったのだ。主体的に周囲が授業に参加できる方法を考え、自分の思いを伝えようとする子供の姿に感心した。

そのほかにも、周り（通常の学級の子供たち）が何をどのくらい知っているのか、どう思っているのかを知るために、アンケートを実施して実態を調べた子供もいた。それは伝える事柄をより具体化するために有効であった。

指導案ができた段階で保護者に見せ、伝えたいことを述べてもらい改善した。授業前には、子供が発表の練習をする場面も見てもらい、意見を述べてもらった。こうして、授業をつくる過程で内容を保護者にオープンにしていくことで、教師一人では考えが及ばないことも、視野が広がりいっしょに練り上げることができた。

(3)難聴理解授業当日

最初に、難聴学級について私が簡単に説明し授業の道筋をつけ、本人が自分の聞こえにくさや周囲へのお願いについて話した。数か月前から準備し、発表の練習も積み重ねてきたので、堂々と発表できた。最初は教師に説明を頼っていた部分も、繰り返すうちに自分で説明したいと言うようになり、当日には、ほとんどの部分を本人が説明した。



補聴器の説明「ここが、マイクです」

参観した校長先生に、「よくやったな。」と誉められ、さらに充実感や自信を得ることができた。授業後、本人からクラスに宛てた作文で、いかに伝えたいという思いを持って授業に臨んでいたかを感じた。

ぼくの話聞いてくれてありがとう！
きこえのじゅぎょう、おもしろかった？
いろいろ知るようになった？
さいごまで話を聞いてくれる2の1が大すきです。
あと、クイズ楽しかった？
そんな2の1のみんなが超大すきです。
(授業後の本人の作文より)

(4)思いが伝わる

授業を実施したどの学級でも、聞く側の子供が、真剣に聞いてくれた。ただ静かに聞いているのではなく、みな自分なりの感想や考えをもって聞いていた。それは授業の最後に書いた感想に表れていた。

・A君のわからないところが多かったけれど、わかるところが多くなりました。
・いつも後ろから話しかけていたのでごめんね。(補聴器は後ろから話しかけると聞き取りにくいので)
(子供の感想から)

また、手話を取り入れた他校の難聴理解授業の後には、手話を使って積極的に関わり合うとする子供たちが見られた。

3 伝えたい・分かりたいの思い

私は今、子供の伝えたいという思いを大切にしながら、きこえの教室の授業や難聴理解授業を手探りで実践を重ねている。その中で難聴児の伝えたいという思いに、分かりたいという思いで応えてくれる多くの子供たちを見た。通常の学級においても、子供の思いを大切にする授業を積み重ねることが、どの子供にとっても自己肯定感を育てることにつながるのではないかと考えている。

Let's try *Origami* in English.

～日本文化の発信～

柏市立柏第五中学校教諭

の ろ せ み ほ こ
野呂瀬 美穂子



1 はじめに

日本国内における外国人留学生数は10年前、約12万人であったが、今は約30万人いると言われている。また、訪日外国人旅行者の数は10年前、約800万人であったが、現在は3000万人を超え、2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けてさらに増加することが予想される。

社会の変化に伴い、生徒は今後、英語で日本文化を発信したり、自分の考えを伝えたりする力がより一層求められる。一方で和食がユネスコの無形文化財に登録されたことや、日本文化が世界文化遺産に多く登録されたことで、外国人は日本文化に以前にも増して関心を寄せている。特に折り紙はその美しさと、老若男女問わず気軽に楽しむことができる点から興味を抱く外国人は多い。そこで生徒にとって馴染み深い折り紙を教材に選び、コミュニケーション能力の育成を目指し、簡単な折り紙の作り方を英語で説明することをゴールに設定して授業実践を行った。

2 授業実践の概要

(1)単元の指導計画

時配	学習内容・学習活動
1・2	助動詞canの理解と運用
3～5	教科書の内容理解とreading
6	折り紙の基本用語
7	英語で折り紙に挑戦
8・9	折り方手順の説明文作成
10・11	完成した説明文の比較 プレゼンテーション

教科書では中学生が折り紙についてshow and tellを行い、ALTが折り紙との出会いについて話をする場面が扱われている。新出文法と教科書の本文内容を終えたあとの6時間で英語で折り紙(*Origami* in English)に取り組んだ。なお授業中の活動については日ごろから基本的に4人の小グループで行っている。

(2)実践内容

①基本的な折り方に関する表現を英語で知る

折り紙に必要な英語表現「折り目」「山折り」「谷折り」などは教科書で扱われず、生徒には馴染みのないものなので、辞書を使って意味を調べる活動から開始した。「山折り」「谷折り」などは辞書にのっている語句ではないので、mountain(山)やvalley(谷)を調べ、そこから意味を推測させた。

次に、実際に生徒に折り紙に挑戦させながら、先に調べた表現を含むフレーズを導入した。折り紙の手順は英訳すると難しくなってしまうので、簡潔な表現に変えて導入することを心掛けた。フレーズになると難易度が増し、なかなか理解できない様子であったが、図を見ながら折り紙を折り、その折り方や形から意味を予測することができた。



②英語で書かれた手順を読んで折り紙を折る

Sumo wrestler(力士)とBoat(ボート)の二つに挑戦した。ここでは、上記①で学んだ表現がどこで使われているのか、それ以外の手順がどのように表現されているのかということを確認しながら課題に取り組ませた。Sumo wrestlerの手順は英文だけでなく、図も示したので、図を見ながら英文の意味を予測して作品を完成させることができた。しかし、Boatは英文だけで手順を示したのでFold in half.(半分に折る)という最初の手順から意見が割れ、苦戦する姿が多く見られた。制限時間内で完成させることができたグループはどのクラスも半数以下となった。

③折り方の手順を英語で作成する

House・Ghost・Dogなど手順の少ないものについて、グループごとに異なる9種類の作品に挑戦した。基本的には上記①②の活動で学んだ表現を使用するようにしたが、②の段階で生徒が苦戦した様子から、表現が難しいものは、手順のうち二つまでなら説明文に図を添えてもよいことにした。活動は以下のように段階を追って行った。

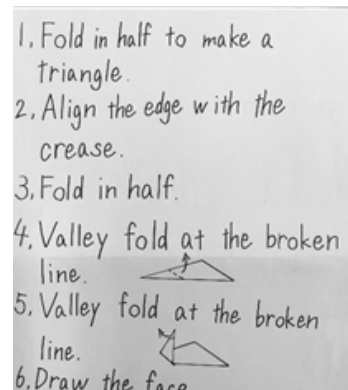
日本語の手順を見て、意見を出しながら、より簡単な折り方、説明文になるように工夫する。説明文は後で英訳することを考え、簡潔な文章にすることを心掛けさせる。説明文が完成したら、日本語に合う表現をワークシートや辞書で調べてメモを取り、それをもとに手順に沿う文章を作成する。

基本的な折り方は前時までに学習済みであったため、活動の初期はスムーズに取り組むことができた。しかし、「斜めに折る」や「袋を開いてつぶす」というような手順で大半のグループの手が止まってしまったため、図を添えて説明するようにアドバイスをした。

④情報の共有

6クラス同時展開で行ったため、一つの作品の手順を英語で説明したものが6枚ず

つ完成した。そこで、自分のグループ以外が同じ作品をどのように表現しているのかを比較するために6枚すべて配布し、見比べる時間を設定した。これは、同じものを説明してもグループによって異なった表現をしていることや、より伝わりやすい表現方法があることに気付かせることを目的としたものである。ほかのグループが作成した手順をもとに折り紙に挑戦し、より良い表現があった場合には、自分たちの手順を再検討し、変更するグループもあり、最終的に右のように手順をまとめることができた。



最後に、活動のまとめとしてグループでプレゼンテーションを行った。「相手に伝える」ことをポイントにし、そのための話し方や、手順の提示方法も工夫させた。残りの生徒は、プレゼンを聞きながら折り紙に挑戦をした。思うように伝わらないことも多く、日本語が出てきてしまう生徒もいたが、一生懸命伝えようとする姿が多く見られた。

3 おわりに

簡単に思われる折り紙も、「外国人に伝える」という点では難しさを感じた生徒が多かったが、同時に英語のおもしろさを感じた生徒も多かった。1年生でもグループで課題に取り組んだり、導入方法や段階を工夫したりすることで未習語句や表現を運用できるということを実感することができた。これからも日本文化に目を向けさせ、それを外国に発信できる力を生徒に付けさせるような授業を続けていきたい。